

郷土かみのかわの歴史・文化財

人物から見た上三川の歴史 宇都宮頼綱

下野宇都宮氏五代当主の宇都宮頼綱は、平安時代末期の1172(承安2)年に生まれ、鎌倉時代前期の1259(正元元年)年に亡くなった人物で、宇都宮を中心とした領主としてはもちろん、鎌倉御家人として活躍するとともに伊予(現：愛媛県)国守護も務めました。また、歌人としても有名で、「新古今和歌集」の撰者である藤原定家とも親交が深かったことが知られているほか、小倉百人一首の産みの親とも言われています。

頼綱が宇都宮氏の当主の座に着いた頃は、宇都宮氏の存亡にかかわる事件が多く、祖父の朝綱が公田横領の罪で訴えられ、土佐(現在の高知県)へ、頼綱自身も豊後(現在の大分県)へ流されたり、1205(元久2)年には初代執権で義理の父でもある北条時政が、

三代將軍源実朝を排斥しようとしてクーデターを起こしたことから、頼綱はこれに協力した疑いをかけられ、無実を証明するため出家するなど、不安定な鎌倉幕府の政治運営が、宇都宮氏に影響しました。しかし、承久の乱の戦功などによつて、頼綱は幕府内部での宇都宮氏の安定化に成功するなど、この後の繁栄の基礎を築いた重要な人物と言えます。

頼綱が上三川に残した歴史的な影響は大きいのですが、それ以上に彼の子どもたちが上三川の歴史に非常に大きな影響を残しています。上三川城を築いた宇都宮(横田)頼業と、多功城を築いた宇都宮(多功)宗朝は、頼綱の子どもなのです。頼業は、石橋山の戦いで源頼朝を救ったことで著名な梶原景時の娘を母に持ち、宗朝は初代執権の北条時政の娘

を母に持つということから明らかのように、頼綱が幕府内において姻戚関係を強化することによつて、宇都宮氏の地位を確固たるものにしようとしたことがわかります。上三川城と多功城が作られた経緯は、頼綱によつて幕府内での宇都宮氏の安定化が図られた後も、有力御家人である三浦氏が、宝治合戦において滅んだように、いつ宇都宮氏が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。宇都宮氏の安定に全てを注いだ父頼綱の意志が、2人の子どもたちや子孫に受け継がれていったことは間違いありません。

を母に持つということから明らかのように、頼綱が幕府内において姻戚関係を強化することによつて、宇都宮氏の地位を確固たるものにしようとしたことがわかります。上三川城と多功城が作られた経緯は、頼綱によつて幕府内での宇都宮氏の安定化が図られた後も、有力御家人である三浦氏が、宝治合戦において滅んだように、いつ宇都宮氏が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。宇都宮氏の安定に全てを注いだ父頼綱の意志が、2人の子どもたちや子孫に受け継がれていったことは間違いありません。

鎌倉時代															平安時代			西暦	年号	できごと
1259	1249	1248	1243	1240	1221	1220	1214	1212	1205	1195	1194	1192	1189	1185	1184	1172				
正元元	建長元	宝治2	寛元元	延応2	承久3	承久2	建保2	建暦2	元久2	建久6	建久5	建久3	文治5	元暦2	元暦元	承安2				
このころ、宇都宮一族の「新〇和歌集」が成立する。															宇都宮頼綱、死去。			1172	承安2	宇都宮頼綱、宇都宮業綱の子として生まれる。
頼業、上三川城を築く。															宗朝、多功城を築く。			1184	元暦元	宇都宮氏、頼朝より宇都宮社務職を安堵され、伊賀国壬生野郷の地頭職に補任される。
宇都宮頼綱、死す。															壇ノ浦で平家滅亡。			1185	元暦2	頼綱、奥州合戦に従軍し、戦功を挙げる。
頼綱、奥州合戦に従軍し、戦功を挙げる。															源頼朝、征夷大將軍に任ぜられる。			1192	建久3	祖父朝綱の公田横領事件に連座し、豊後国国府へ流される。
祖父朝綱の公田横領事件に連座し、豊後国国府へ流される。															初代上三川城主宇都宮(横田)頼業が生まれる。			1194	建久5	畠山重忠の乱に際し、北条氏側につき戦功を挙げる。
畠山重忠の乱に際し、北条氏側につき戦功を挙げる。															牧氏の変が発生。頼綱、潔白を証明するため宇都宮で出家し、京都で隠棲。			1195	建久6	鴨長明、「方丈記」を作る。
鴨長明、「方丈記」を作る。															頼綱、このころまでに、幕府に許される。			1205	元久2	初代多功城主、宇都宮(多功)宗朝が生まれる。
初代多功城主、宇都宮(多功)宗朝が生まれる。															頼綱、承久の乱において戦功を上げ、伊予国守護職を与えられる。			1212	建暦2	このころ、頼業が伊予国守護に任ぜられる。
このころ、頼業が伊予国守護に任ぜられる。															宇都宮頼綱の子、泰綱、評定衆に任ぜられる。			1214	建保2	宇都宮頼綱の子、泰綱、評定衆に任ぜられる。
宇都宮頼綱の子、泰綱、評定衆に任ぜられる。															このころ、頼業が伊予国守護に任ぜられる。			1220	承久2	頼綱、承久の乱において戦功を上げ、伊予国守護職を与えられる。
頼綱、承久の乱において戦功を上げ、伊予国守護職を与えられる。															宇都宮(横田)頼業と、多功城を築いた宇都宮(多功)宗朝は、頼綱の子どもなのです。			1221	承久3	頼綱は、石橋山の戦いで源頼朝を救ったことで著名な梶原景時の娘を母に持ち、宗朝は初代執権の北条時政の娘
頼綱は、石橋山の戦いで源頼朝を救ったことで著名な梶原景時の娘を母に持ち、宗朝は初代執権の北条時政の娘															頼綱が上三川に残した歴史的な影響は大きいのですが、それ以上に彼の子どもたちが上三川の歴史に非常に大きな影響を残しています。			1240	延応2	頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。
頼綱が上三川に残した歴史的な影響は大きいのですが、それ以上に彼の子どもたちが上三川の歴史に非常に大きな影響を残しています。															頼綱が宇都宮氏の当主の座に着いた頃は、宇都宮氏の存亡にかかわる事件が多く、祖父の朝綱が公田横領の罪で訴えられ、土佐(現在の高知県)へ、頼綱自身も豊後(現在の大分県)へ流されたり、1205(元久2)年には初代執権で義理の父でもある北条時政が、			1243	寛元元	頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。
頼綱が宇都宮氏の当主の座に着いた頃は、宇都宮氏の存亡にかかわる事件が多く、祖父の朝綱が公田横領の罪で訴えられ、土佐(現在の高知県)へ、頼綱自身も豊後(現在の大分県)へ流されたり、1205(元久2)年には初代執権で義理の父でもある北条時政が、															頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。			1248	宝治2	頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。
頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。															頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。			1249	建長元	頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。
頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。															頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。			1259	正元元	頼綱が幕府によつて攻められるかわからない状況に置かれていたことも、大きな理由の一つと考えられています。